



**久保繁造**  
『秋果』昭和17年  
油彩・額装（90・7センチ×72・5センチ）  
「見てみて、ブドウと洋ナシだよ」と身を乗り出しながら器に盛られた果実を見せる子どもと、真っ白なエプロンを着て椅子に腰掛けた母親が手を差し出しています。傍らには、その様子を温かく見守るように黒い犬が描かれています。背景の赤とエプロンの白、犬の黒。洋画家・久保繁造さん（明治44年―平成18年）の作品は、これらの強い色を組み合わせたながらも、穏やかな優しい雰囲気を感じさせているのが特徴です。

未来への贈りもの  
本市収蔵作品

群馬郡群馬町（現・高崎市）に生まれ、久保さんは、渋川中学（現・渋川高）を卒業後、日本大学芸術学部に入學。次いで太平洋美術学校専科で学びました。卒業後は郷里に戻って教鞭をとりながら、清水刀根の指導を受け、県展と二科会を中心に作品を発表。平成3年には二科会で総理大臣賞を受賞しました。県美術協会会長を務めたほか、前橋では市民展の創設に携わるなど、群馬の美術界をリードしたひとりでした。

久保さんは長い画歴の中で、絵具を溶かしたり削り取ったりなど、さまざまな技法を積極的に試みました。例えば、本作品はエアブラシを使って描いています。描くテーマも変化しますが、郷愁漂う女性像を中心とした家族的な情景や、ヨーロッパ滞在を機に取り組み始めた西欧の裏通り、酒場などの人情味ある街角の風景を、久保さんは好んで描きました。澄んだ色調と軽やかな線描が人々を魅了します。

問い合わせは 文化国際課 38068-5825

大きな大会で勉強になりました



全国和牛能力共進会で1等賞1席  
八木原 茂さん 62歳  
上沖町

先月25日から29日まで、長崎県で開催された第10回全国和牛能力共進会。生後14カ月から17カ月未満までの繁殖用雌牛を対象とする部門で、群馬県の代表として出品した「かみおき1126」が一等賞一席に輝いた。最高賞となる優等賞に次ぐ、とても栄誉ある賞だ。

「優等賞には届かず、あと少しのところでした。輸送に25時間もかかり、その間は餌を全く食べられず、牛の体調が万全ではなかったんです。大勢の観客を前にした5年に一度の大会で、少し残念でしたが、いろいろ勉強になりました」

現在は主に妻と2人で50頭ほどの親牛を育てている。米作も営んでおり、休日もなく働く毎日が続く。

「出品牛は5月ごろから特別な管理を

始めました。手綱を引いての調教や広い場所での運動、毛並みを美しくするシャンプー・リンスなど、本番に向けて準備を進めてきたんです」

高校卒業後、父親が米麦中心に営んでいた農業に就く。畜産に比重を置き、購入した子牛を肥育していたが、繁殖中心の経営へと転換を図ってきた。

「BSEや口蹄疫、原発事故による放射能など、畜産もさまざまな課題にぶつかり、経営は楽ではありません。だからこそ、手塩にかけて育てた子牛が高く売れたときは、苦勞も吹き飛びます」

高品位な肉牛を生産するには血統はもちろん、その潜在能力を最大限に引き出すことが大切。今後とも、全国に誇る前橋産和牛を送り出してほしい。



120周年を記念したイベントなど盛大に

市制施行120周年の記念すべき年の秋。市政功労者表彰やトークショー、まちなかのイベントなどが行われ、にぎわいました。

**120周年市政功労者表彰式**  
11月4日、本市に多大な功労のあった709人を表彰。また、式典後、西村京太郎さんと津田令子さんによるトークショーが和やかな雰囲気で行われました。



まちなかがズンズンにぎやかに

中心市街地では「食と健康のイベント」「ハロウィン仮装コンテスト」などで大にぎわいに。たくさんの方が訪れて、収穫・食欲の秋を思う存分、楽しんでいました。

